

代表ブーム」と 「国際化」で躍進

強くなつた日本スポーツの原動力

近年、日本スポーツの躍進が目立つ。かつては世界と対峙できなかつた競技でもトップレベルの力をつけてきている。その背景を探つた。

編集部 川口 穂

1989年12月29日、東京証券取引所は万雷の拍手に包まれた。年内最後の取引日「大納会」のこの日、日経平均株価の終値は史上最高値となる3万8915円87銭を付けた。バブルのただなかにあつた日本経済が絶頂を迎えた瞬間だつた。

空前の株高に沸いたその日、錦織圭は東京の狂騒から遠く離れた島根県松江市で生まれた。姉が一人いるごく平均的な家庭だった。5歳でテニスをはじめメキメキ頭角を現すと、13歳でテニス留学のため渡米、17歳でプロに転向する。沈みゆく日本経済とは対照的に、錦織は己が力で道を切り開き、世界のトップへと上り詰めていった。

錦織以前、世界と戦える日本の男子テニス選手はほとんどいなかった。男子シングルスの世

界ランクイン最高峰は松岡修造が92年に記録した46位、戦後の4大会では同じ松岡の95年ウインブルドン8強が最高記録。だが、錦織はあつという間にその記録を塗り替えていく。18歳でツアーチ初優勝を果たし、21歳で松岡のランクイン記録を超えると、2014年に全米オープンで準優勝。翌15年には世界ランキング4位につけた。世界の超一流選手の証しであるランキン10位以内には、計212週にわたつて在位した。

平成期にまいた種開花

朝日新聞のスポーツ担当編集委員で、錦織を長く取材してきた稻垣康介さんはこう語る。「錦織圭はバブル経済が最高潮だった日、逆に言うと日本の凋落が始まった日に生まれ、バブ

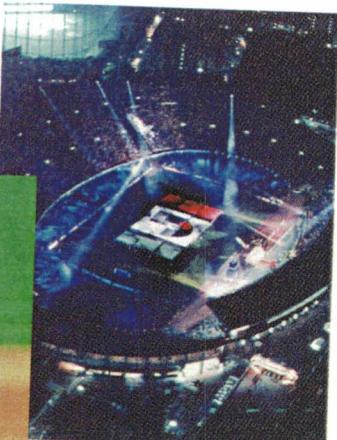
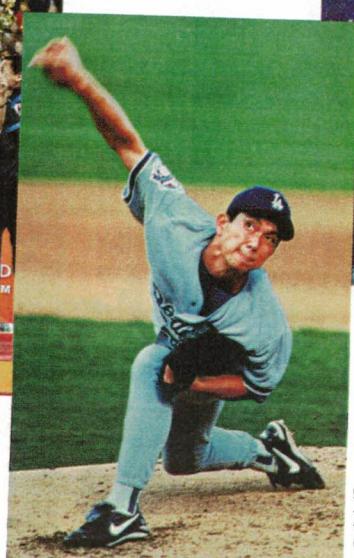
ル後の停滞感・閉塞感とは関係なしにアメリカへ飛び立つて、コーチらの助けを得ながら独力でそこまで上り詰めた。平成から令和にかけて強くなつた日本スポーツを象徴する人物です」

近年、日本スポーツの躍進が目立つ。サッカー、ラグビー、バスケットボールなどのワールドカップ（W杯）が日本代表の活躍で盛り上がり、21年の夏季東京五輪、22年の冬季北京五輪ではいずれも過去最多のメダルを得た。

スポーツジャーナリストの二宮清純さんは「平成期にまいた種が開花した」として、原動力を二つ挙げる。一つはJリーグの誕生と代表ブーム、もう一つが国際化だ。



2011年、サッカー女子W杯。準々決勝で当時2連覇中だったドイツ、決勝ではPK戦の末アメリカを破り、初優勝した



93年、Jリーグが開幕。ジーコ、リネカー、リトルスキーら世界的な名選手も参戦し、レベルアップに一役買つた

95年にドジャース入りした野茂英雄は同年、オールスターにも出場。トルネード投法で日本にブームを巻き起こした

立される。93年5月に開幕する
と、大ブームを巻き起こした。
「Jリーグが優れていたのは地
域密着に加え、アンダーカテゴ
リーを持つことを義務付けた点
です。それまで日本のスポーツ
は強化一辺倒でした。一方、サ
ッカーはJリーグを頂点に下部
組織を整備し、普及・育成に力
を入れたんです。いわば底辺拡
大で、大きな底辺を持つビラミ
ッドだからこそ頂点も高くなる。
Jリーグの成功以降、各競技が
それを参考に普及・育成に力を
入れるようになりました」

5月、Jリーグが開幕。10月、日本代表がW杯アジア最終予選に挑むが、最終戦でイラクと引き分け、本大会出場を逃す
95 野球
野茂英雄がメ・大リーグのロサンゼルス・ドジャースに入団。13勝を挙げ、新人王・最多奪三振を獲得
98 サッカー
W杯本大会に初出場。代表は全員が国内組だった。大会終了後、中田英寿がイタリア・セリエAのペルージャに入団
2007 フェンシング
世界選手権女子フルーレ団体で日本代表が銅メダル。翌08年北京五輪の男子フルーレ個人では太田雄貴が銀メダル、23年世界選手権では金二つを含むメダル4個を獲得
11 サッカー
日本女子代表が女子W杯で優勝
14 テニス
全米オープンで錦織圭が決勝進出、準優勝を果たす。4大会での男子決勝進出はアジア初
15 ラグビー
日本代表がW杯で南アフリカに勝利。「ブライトン・ミラクル」と呼ばれ、世界的なニュースとなる
16 バドミントン
リオ五輪で高橋礼華・松友美佐紀組が女子ダブルス金メダル。五輪・世界選手権を通じて日本勢39年ぶりの金メダル
19 ラグビー
W杯で日本代表が1次リーグを4戦全勝で突破。初のベスト8に進出する
22 サッカー
W杯で日本代表がドイツ代表・スペイン代表を破り、2大会連続の16強進出
23 野球
WBCで侍ジャパンが3大会ぶり3度目の優勝
陸上
世界陸上・女子やり投げで北口榛花が金メダル
バスケットボール
男子日本代表がW杯で3勝を挙げ、48年ぶりに自力での五輪切符を獲得

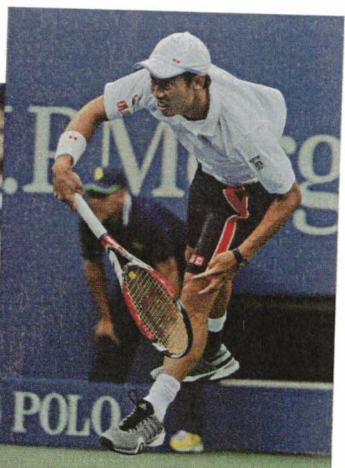
ク戦は、深夜帯にもかかわらず
平均48・1%、瞬間最大58・4%
という驚異的な視聴率を叩き
出す。二宮さんは続ける。
「この代表チームは各競技にも
波及しました。それまで『全日
本』とか『ジャパン』と呼ばれ
ることが多かったナショナルチ
ームが『日本代表』の呼称に統
一されていき、代表の価値を高
めました。注目度は上がり、選
手たちもそれまで以上に代表入
り、代表での活躍を本気で目指
すようになつたんです」

もうひとつは国際化だ。象徴的
な出来事は95年。野茂英雄が
渡米、ロサンゼルス・ドジャ
ヤーに入りし、日本人2人目のメジ
ヤーリーガーとなつた。
「プロ野球という日本最大のス
ポーツ産業のなかで十分に稼い
でいたトップ選手が、何の保証
もない大リーグへ飛び込んだイ
ンパクトは大きかった。そして、
『通用しない』という声をはね
のけてあれだけの活躍をし、連
日のように報道されました。後
に続いた日本選手の活躍は言わ
ずもがなですし、野球以外のス
ポーツでも若くから海外に出る
のが当然になりました。他競技
の選手が野茂に直接影響された
わけではありませんが、野茂が
日本スポーツの鎖国を解いたと
は言えるでしょう」

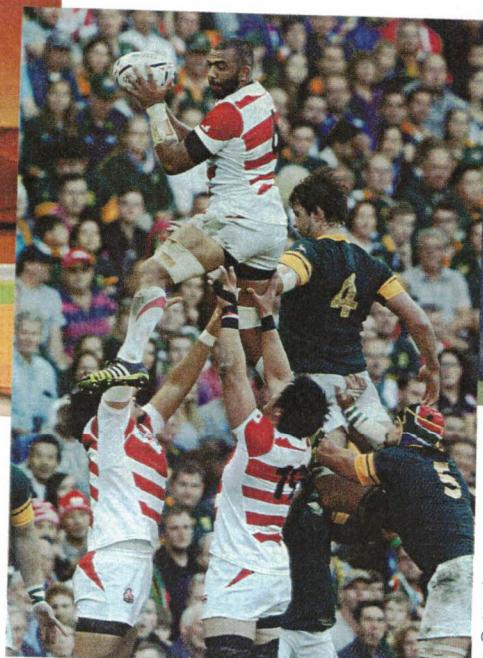
海外からの指導者の力

例えばサッカーでは、W杯初
出場を果たした98年は代表全員
が国内組だったが、前回22年大
会では代表26人のうち19人が海
外チームの所属だった。

国際化といえば、海外から來
た指導者の力も大きかった。ラ
グビーでは、12年にオーストラ
リア出身のエディ・ジョーンズ
が、日本代表の監督として就任。
日本代表は、その手腕で強豪の
オーストラリアを破り、W杯決勝
進出を果たした。また、テニス
では、元W杯優勝のジョン・エ
マヌエルが日本代表ヘッドコーチ
として就任。日本代表は、彼の指
導で世界ランク1位の山口享也
を輩出し、W杯決勝進出を果た
した。



14年、全米オープン決勝を戦う錦織圭。4大会のシングルスで決勝に進出するのは男女通じて日本人初だった



15年、ラグビーW杯の南アフリカ戦勝利はスポーツ史上最大の番狂わせとも言われ、オーストラリアで映画化もされた



リオ五輪バドミントン女子ダブルスで高橋礼華(右)・松友美佐紀組が優勝。後方の朴柱奉は04年以来代表ヘッドコーチを務める

23年、WBC決勝で米国を破る。
決勝前、大谷翔平は「憧れを
捨てて勝つことだけを考えよ
う」とチームを鼓舞した

が代表ヘッドコーチに就任。15年W杯で強豪・南アフリカを破る大金星を挙げ、後任のジェイミー・ジョセフは19年大会で日本代表を初の8強に導いた。バスケットボールではトム・ホーリーが女子代表を率いて東京五輪銀メダル、21年からは男子代表のヘッドコーチに。今年のW杯では3勝を挙げ、48年ぶりの3人は就任以前に日本でのプレーやコーチ経験があり、日本に何が必要かわかつていた。前出の稻垣さんはこう話す。

「ラグビーでもバスケットでも、世界のレベルを肌で知るコーチが世界で勝つために必要なものを明確な戦術として授け、相当タフなトレーニングを課しました。選手も必死に食らいついた。また、フェンシングでは03年に日本協会の招きで来日したウクライナのオレグ・マツエイチュクコーエ、バドミントンでは04年に来日した韓国の朴柱奉(パク・ジュン)が日本代表を世界と戦えるレベルにまで引き上げています」

体育会的縦割りの変化

ラグビー元日本代表で神戸親和大学教授の平尾剛さんは、外国人コーチの手腕で選手の意識が大きく変化したと指摘する。「かつては多くのスポーツで代表選手自身が世界を仰ぎ見てい

ました。ラグビーでも私が99年W杯に出場したころは、強豪国相手に『何とか善戦できれば』という意識があつた。3戦全敗でした。しかし、エディが完全に風土を変えた。ハードトレーニングと同時に勝つためのビジョンと意識を植え付けました。あの南アフリカ戦から8年がたち、今の代表選手は世界の強豪と渡り合うことをもはや当たり前にとらえています」

日本スポーツの風土が変わつたあることも見逃せない。外国人コーチたちの存在もあり、体育会的な縦割りの上下関係にも変化がみられるという。「選手として活躍した日本人がそのまま指導者になると、選手時代の上下関係に引きずられやすい。選手はコーチに意見できないし、選考にも無意識の影響があつたはずです。しかし外国人指導者のことでそれがリセットされ、大学スポーツなどでも固定化された上下関係を壊そうとする動きが広がりつつあります。上下関係が小さくなれば多様な意見が出てコミュニケーションが深化します。戦略面でも戦術面でもチームに良い影響をもたらすはずです」(平尾さん)

行き過ぎた勝利至上主義にも歯止めがかかり始めた。日本のスポーツ界にはこれまで、小学生代から過剰に勝ちを求める生年代から過剰に勝ちを求める

男子バスケットボールは世界大会で2006年以来勝利がなかったが、23年、W杯で3勝を挙げた。最終順位は19位



東京五輪スケートボード女子パーク決勝で演技する四十住さくら。国籍を超えて喜び、励まし合う姿が感動を呼んだ

勝ち負けより楽しむ

勝ち負けよりも、楽しむ――。

こうした意識は都市型の新スポーツで顕著だ。東京五輪で日本勢が金3個を含むメダル5個と大活躍したスケートボードでは、他国の選手が決めた大技と一緒に喜び、失敗した選手には皆が駆け寄って励ます姿が感動を呼んだ。女子パーク金メダルの四十住さくらはJOCが行つたインタビューでこう話している。「本当に楽しく、みんな友達とワイワイしながら、お祭りのような感じでプレーしています。それが当たり前だよね」



photo 朝日新聞社